

## 銭湯とトイレの思い出

二八回生 池島 正眞

最近、TVを観ていると、「出演者の顔は分かるが名前が出てこない」と焦ることがあります。必死に思い出そうとして、思い出せる時もありますが、完全に忘却の彼方の場合も時々あります。昔の大事な思い出もそのような状態になってきているのではないかと案じる自分がいます。

そんな折に、逆らえない先輩の編集責任者から「私の宝物」のテーマで、「また寄稿頼む」とメールが来ました。自分にとつて、現在の「宝物」とは何でしょう。最初に家族、友人（仲間）とかが浮かびましたが、認知機能を気にする年ごろとなった今、「昔の懐かしい思い出」も含まれると考えました。そのような思いから、「銭湯とトイレ」を話題にして、今回のテーマに挑戦してみます。

私たち一家は、戦争で疎開していた和歌山市の母の

の入浴の仕方を教えるから」と提案してきました。その時に、私は、新しいのを買わなくても「これ使えるよ」と、いつも何故か玄関の隅に置いてある洗面器を取り上げようとしました。すると、「あつ、それ汚い！」と母が叫びました。「ええ、なんで汚いの？」と返すと、「それ、お父さんのお尻用よ」と説明され、結局、その日、母の提案を受け入れ、最後の女湯に行くことになりました。その日の銭湯では、下足・脱衣箱の鍵の管理、銭湯での礼儀作法、一人で背中を洗う方法、帰りの待ち合わせ方などについて、その場特訓を受けました。そうして、その後、男湯に一人で入浴するようになりながら、恐らく、最初の頃は、教えられたことをしながら、他の人はどうするか観察しながらの入浴だったと思います。

そうしたある日、洗い場には客がいましたが、浴槽には色白のギョロ目風のおじさんが一人で入浴していました。いつもの教えられた作法を済ませ、私は浴槽に入りました。入ってすぐに、私をじろつと見て、入れ替わるように、そのおじさんが湯から出ようとしました。その時に、後ろ向きになって背中を見せ、その背中一面には赤、青、黒などの色で絵が描かれていま

実家から池田市にある父の勤務先住宅（池田住宅）の2階に、私が4歳（昭和23年）の頃に転居しました。片廊下式木造校舎のような長屋式建物の池田住宅には、2階住戸は端の階段室側に設備されたトイレの共同使用で、入浴設備は有りませんでした。そのため、風呂は、いつも母に連れられて銭湯を利用し、その銭湯では、社宅の人と顔を合わせるがよくありました。小学生に上がる前の6歳（幼稚園児）の頃と思います。入浴中に、どうも迷惑顔で睨まれているような顔見知りの人の視線が気になるようになりました。当時、私は背が高い方で、小学2、3年生くらいに見られ、女湯でなく、男湯に行くべきと思われていたのかもしれない。そのような視線を感じ始め、子供心ながら生まれて初めて「男」を意識し、母にそのことを相談しました。母は、少し驚いた様子でしたが、「まだ幼いのだから気にせんでええよ」と笑って相手にしませんでした。その後の銭湯で、様子を見て、やつぱり嫌がられていると思い、母から声をかけられた時に、私は女湯に行くのを断固拒否しました。母は、「分かったけど、男湯に行くなら、お前の入浴用具を買ひ揃えな」とね。でも今日は我慢してよ。これを最後に、一人で

した。魚（鯉）の絵だったように思いますが、初めて見る光景で、「どうして背中に絵が・・・」と、驚きと不思議で見入ってしまいました。お湯でピンク色になった肌の絵が活きているような迫力を幼心ながら感じました。帰り道、興奮気味に、母に真っ先にこのことを報告しました。恐らく、刺青のことを説明されたと思いますが、覚えていないのは、怖い人かもしれないこと、じろじろ見ないことなどの注意を受けたことです。そのようなことを含めて、銭湯は、私の初めての「男」を意識した場所でした。

ところで、執筆にあたり、一般公衆浴場（銭湯）の「混浴できない年齢」について、少し調べてみました。厚生労働省の通達（平成12年）「公衆浴場における衛生管理要領等について」の中で、「銭湯では、おおむね10歳以上の男女を混浴させないこと」としています。それを受けた全国（都道府県等）では、7歳以上から12歳以上の範囲で禁じられ、統一されていません。その全国の中では、京都が一番厳しく7歳以上となっているようです（Jタウンネット調べ）。このことから、私は、最も厳しい京都レベルで、早くも自覚したということになりました。

この池田住宅の存在した場所は、現在の地図を見ると、「逸翁美術館」が建っています。それに隣接して「池田文庫」が、近所には小林一三記念館（小林一三旧邸「雅俗山荘」）が建っています。「逸翁」は、阪急東宝グループなどの創設者「小林一三」の雅号です。振り返れば、この住宅に隣接した屋敷、近所の旧邸には、会社の偉い人の家だから、「入らないように」と父から釘を刺されていました。当時、木が茂っているところに無断で入って、蟬取りなどに熱中していた腕白小僧に親は心配したからでしょう。

このような社宅生活を経て、小学2年の新学期前に吹田市（4階建て府営豊津アパート）に転居し、小学2年（千里第2小学校）から中学・高校時代を過ごしました。その豊津アパートでは、各戸水洗トイレ（和式）階段室（8戸）単位の共同利用風呂になり、銭湯に通うことが殆どなくなりました。

銭湯は、その後、東京でサラリーマン生活を過ごした若い時代に、新幹線などの無かった東北地方の夜行列車での出張時に利用しました。夜行で朝早い時間に到着する朝一の、会合前の出張先駅前銭湯、出張帰りで直接出社前の東京駅八重洲地下街の今は無い東京温泉

泉などが懐かしい思い出となっています。

近年では、「一般公衆浴場」（俗にいう銭湯）は数が減り、ヘルセンター、サウナ風呂、スパ、銭湯などの「その他の公衆浴場」が増えてきているようです。中国上海に進出した日本式のスパ、銭湯が2号店を出し、3号店を武漢に計画しているなどのニュースも耳にします。昔、一緒に働いたことのある中国人女性（武漢出身の若い人）に日本の生活で一番違和感のあることは何ですか？と聞いたことがあります。その女性には、「銭湯」と答えました。中国は広いので断定できませんが、銭湯のような皆が裸になる施設を経験していないため、恥ずかしくて慣れるまで大変だったようです。それが、なぜ、いま中国で受け入れられているのでしょうか？信じられない思いです。

このような内容で寄稿文を執筆し始めていました。その頃に、日曜ビッグバラエティ「池上彰がみつけた！ニッポンの得意技SP」（テレビ東京で平成29年4月放送）で、「トイレ」について、次の話題が取り上げられました。

(1) 黄害（公害）訴訟となった鉄道（垂れ流し）トイレ、

(2) 女性の立ちション用便器、

(3) 中国の公衆トイレ、

(4) 日本のトイレ（自動温水洗浄便座）の歴史。

この番組を観て、私の記憶の中にしまい込んでいた、それらに関連した思い出が一度に蘇ってきました。

寄稿文の締め切り近くなって、筆が進まず、悩んでいた時に観た番組で、上記の話題について、忘れられない私の思い出を追加して、寄稿することにしました。

(1) 垂れ流しトイレは、昭和43年に国鉄沿線住民（場所不明）から公害訴訟を受けたとの話題でした。

この垂れ流し列車の運行路線近くに住む人は大変だろうと実感する思い出がありません。絵が好きで夢になっていた昭和33年（吹田第1中2年生）の夏休みに、吹田操車場の運行路線近くで、「働く人」をスケッチしていた時でした。列車通過時に逃げ遅れて噴霧液を浴びましたが、絵が佳境に入っていた

(2) 女子トイレの立ちション用便器を紹介していました。

紹介された女性の立ちション用便器は、Jのような形状の幅が狭いもので、後ろ向き（？）に跨いで中腰で用を足すのではと想像できるものでした。池上彰さんは、幾分言いくさそうな雰囲気、詳細説明をしませんでした。

1964年（昭和39年）東京五輪の旧国立競技場では、初めての女子選手用立ちション便器の増設で関係者が苦労した話を聞いたことがあります。第三者の立ち合いの必要ないドレーン検査や出場選手の緊張状態でのニーズを考慮して、外国では、立ちション方

式が一般的なのでしょうか？公衆トイレの場合、日頃のきめ細やかな清掃管理が十分でないといふ便器が汚れたままになることがあります。特に洋式便器では、その汚れを嫌って、それに触れないで用を足すのは難しい所作になりそうです。そのため、公衆トイレでは、比較的省スペースで簡便に用が足せる女性用立ちションは理解できるような気がします。新国立競技場では、おもてなし十分で、この便器は採用されないのでしょうか？五輪開催後の利用価値のない遺産とならないように、この便器は採用されないかもしれません。

ところで、女性の立ちションは、幼い頃(小学校低学年の頃)に田舎の山道で着物姿の母が中腰で手際よく用を足すのを目撃し、驚いたことがあります。その時、立ちションは男だけがするものと思っていましたので、母に訊ねたことを覚えています。母には、「恥ずかしいこと聞くんやないの!」と言われ、今まで沈黙を守ってきました。あの時に、下

ろさなくてもよい着物専用の女性下着があることを知りました。大正元年生まれの母は、バスケットボールの和歌山県代表で明治神宮体育大会(国体の前身)の代表になった経験があります。お転婆のなせる業か？昔の田舎では当たり前のことなのか？そこまでは聞けません。橋本市と九度山(伊都郡)に父系の親戚が居て、祖父の墓があり、お彼岸に両親と3人で人里離れた山道を歩いて、墓参りと親戚巡りをしていました。その時に母の緊急トイレ事件が発生したのです。父は「近くに民家はないので、その辺で用足すしかないな」と母に促していました。その事件以降、着物で長距離移動にも懲りたのか、母は墓参りに不参加となり、父と私の二人だけの定例行事となりました。農家出身の祖父の実家(橋本市)を訪ねた時、住宅内の普通のトイレのほか、庭には整備された大きな屋外トイレ(床付きの肥溜め)がありました。親戚の人は、夜間以外は、そこで普通に用を足すと言っていました。これも、身内だけの

### (3)

生活で自然に習慣づけられた慣れでしょうか？

中国の公衆トイレを紹介していました。

実は、昭和54年に天津市と神戸市が姉妹都市の関係で「技術交流展」が天津市で開催され、建築技術講師として参加しました。交流会終了後、北京で滞在時間があり、王府井(東京の銀座に相当する市街地)、万里の長城などに、仲間(先輩)たちとタクシーを借り切って観光しました。その頃の中国では、流しのタクシーなど無く、常に帰りの交通手段も考えておかなければなりませんでした。

王府井では、お腹の調子があまり良くなく(飲みすぎか?)、トイレに行きたくなりそうなのを我慢していました。街中見物中に、少々緊急事態の状況になってきたときに、「廁」、「女」、「男」と書かれたレンガ造建物を見つけました。砂漠でオアシスに巡り会えたような気分で、先輩たちを待たせ、その建物に飛び込みました。真っ先に目にした光景は、コンクリート床に四角い穴が6つほど開

けられた全く仕切りのない空間で、奥に爺さん一人が入口を向いて用を足していました。暗がり気味とは言え、突然、異人に踏み込まれた爺さんもびっくり眼で、双方が一瞬目を合わせ、硬直するような状況になりました。咄嗟に、ここでは無理と一度緩みかけた括約筋を締めなおして、退散しました。先輩仲間に見光中止の同意を得て、待たせたタクシーでホテルに戻り、何とか無事に用を足した、冷や汗・脂汗ものの思い出です。テレビの紹介では、きれいな水洗トイレでしたが、金隠しも仕切りもない空間は昔と変わりませんでした。

また、万里の長城の公衆トイレでは、大の方は使用者の頭が垣間見え(立ち上がれば丸見え?)の状態で、自分が利用するには、勇氣が要ると感じました。

トイレ空間は、恥ずかしさの意識感覚の違い、慣習による慣れ、安全(犯罪)対策、経済性など、日本とは、建築空間への配慮差があるようです。

(4)

自動温水洗浄便座では、衛生陶器を扱うT社のウオッシュレット(昭和55年第1号発売)の歴史を紹介していました。

思い起こせば、その頃にT社のTVコマージャナル「おしりだって洗ってほしい」でこれが初めて紹介され、世間を驚かせるとともに有名になりました。これを機に、同業I社などの製品を含めて自動温水洗浄便座(温水便座)は、日本のトイレ環境には、今や必需品になっていると言っても過言ではありません。実は、この製品のオリジナルが輸入米国製品(痔患者用便座)に由来していることを、最初に国産化したのがI社だったことを、ご存知でしょうか？

昭和39年に豊津アパートから枚方の戸建住宅に移った我が家のトイレに、遅くとも昭和40年代半ば頃には、温水便座が導入されました。

父は、若い時から痔を患い、手術経験があり、トイレには人一倍気を使っていました。それが最初に話題にした「父専用の洗面器」です。

日本において、この自動温水洗浄便座が受け入れられた理由の1つには、上水道などのきれいな水が利用できることも大きいと思っています。(完)

中国については、最初に訪れた昭和54年の北京、天津での経験談で、その後、驚異的な経済発展を遂げた現在では、大きく変貌していることと思います。そのような昔のことを思い出しているうちに、長文となってしまいました。少々下ネタ気味の話題で、会員の皆様には不快な思いにならないことを願っています。



幼稚園児(6歳と1か月の頃)  
〈父と箕面の滝への道すがら〉



小学1年生(7歳前後の頃)  
〈社宅近所で無視鳥網を持って〉

20数年間、父と生活を共にした洗面器は、温水便座の導入により、任務を終え、消えました。導入された温水便座は、T社販売の米国輸入製品か？I社の国産品か？分りませんが、手元操作でなく、床に置いたゴム製ペダルを踏んで操作する方式でした。私は、興味本位で、試しに時々使ってみました。湯加減で熱いと感じたことはありませんが、噴水(放水)の狙いが的外れの場合があり、的中させるのにお尻を動かして調整する必要がありました。「沈黙」などのキリスト教文学作品を残して逝った某有名作家は、これで熱い目にあつて、こんなもの使えないと酷評したとかいう話もあつたようです。当時、温度制御と放水角度に難があると言われた温水便座ですが、それでも、使っているうちに、その心地よさを感じるようになっていました。その後、枚方の実家では、台所、風呂、トイレなどを増改築し、TVコマージャナルの手元操作の改良された一体型自動温水洗浄便座に替わっていました。